

巻 頭 言

あきた数学教育学会
会 長 田仲誠祐

あきた数学教育学会誌の創刊を皆様と祝うと共に、玉稿を提供された会員、発刊のため尽力いただいた関係各位に心よりお礼申しあげます。本会は、秋田算数・数学教育研究集会の20年を超える流れを受け継いでいるものの、学会としては平成30年3月に産声をあげたばかりです。設立の理念を大切にしながらも、進むべき方向について広くご意見をいただき学会としての足腰を鍛え、たえず「創発」を志向し続ける組織でありたいと考えます。記念すべき創刊号の序論にあたり、秋田に誕生したこの学会で大切にしていきたいことを2点述べさせていただきます。

第一に大切にしたいことは、「数学教育とは何か」を問い続けてきた秋田の精神性です。多くの場合、秋田の強みとして全国から注目される授業の質の高さが挙げられます。私はそれを支えてきた要因の一つに、数学教育に対して自らの足許を問う教員の姿勢があったとみています。長く本県の数学教育を牽引され、本学会の前身である秋田算数・数学教育研究集会を創設した湊三郎氏は「私の数学教育研究を突き動かしてきたのは、この基盤の探究であった」と述べられています。このような問い及び姿勢は、人工知能（AI）の飛躍的な進化、グローバリズムとナショナリズムが交錯する社会の急激な変革期にあってはますます重要になります。表層の変化だけに流されずに、主体的に生きる人間の教育という視点で、数学教育の在り方を問い続ける学会でありたいと考えております。

二点目は、本学会の目的です。会則には、次の2点が示されています。

① 秋田県の数学教育の発展に努め、数学文化の振興・創造に寄与する。

② 教員の研修の輪を広げ、秋田の授業力と共同研究システムを継承・発展させる。

①では、「数学教育の発展」と「数学文化の振興・創造」の2つのことを述べています。これは、「数学とは何か」について問い続ける中で形成されてきたものです。一般に、「数学は学校で学ぶもの」「数学は特定の専門技術者のもの」と捉えている人が残念ながら少なくありません。一方、Bishopは数学を音楽、宗教、美術と同様に文化現象として捉え、数学とは人間が様々な価値を追求する上で目的的に構成してきたものであり、数学的文化に子どもたちを引き入れる数学教育を数学的文化化と表現しました。これは、豊かな数学教育の前提には、豊かな数学的文化があることを意味します。過去に、秋田では、草の根数学文化の創出を目的に「あきた算数・数学フェスティバル」を数学教師・民間企業等の協働により2000から10年間にわたり実施してきた歴史があります。このような経験を基盤として、本学会の目的は、数学的文化化を担う者が、視野を学校だけに限定せず社会にも目を向け、数学文化の振興・発展にも貢献することを宣言したものであるといえます。

近年、秋田では、教員の大量退職・大量採用期を迎えつつあり、教育実践知の継承と発展が喫緊の課題となっています。幸いにも、本学会員には、高い志をもつ教員、教育行政関係者、教員志望の学生、さらには、数学教育への情熱を燃やす退職された諸先輩、秋田県外から本県教育の現状を継続的に調査してきた研究者等、多彩な方々が名を連ねてくださいました。秋田の数学教育に関する研究成果を蓄積し、未来に引き継ぐ重要な役割を十分に担いやる学会と自負しております。さらに、本学会誌の創刊により、数学教育の目指すべき方向性についての議論を一層活性化するとともに、秋田県内だけに止まらず日本及び世界の数学教育の発展にささやかではあっても貢献できるよう願っております。